報告

地域医療に関わる 地域別意見交換会（3）

伊達市・北見市

常任理事・医療政策部長　直江　寿一郎

当初予定より1カ所追加し、本年度道内7カ所で実施する「地域医療に関わる地域別意見交換会」の5・6回目を伊達市、北見市で開催した。

当会からは、長瀬会長をはじめ医療政策部所管の役員が出向き、医師確保対策の実施状況や、「緊急臨時的医師派遣事業」、30区域別自治体病院の見直し方針と郡市医師会の管轄、保健医療福祉圏域連携推進会議などについて説明。また、昨年4月に、郡市医師会を対象に当会が実施した「地域医療に関する調査」の結果を報告した。

日胆ブロックでは、室蘭市で、危機的状況に陥っていた周産期医療を病院間の垣根を越えた出張派遣により立て直しにこぎつけたこと、北見ブロックでは、紋別市の夜間救急体制確保のために、医師会員が道立紋別病院のスタッフとともに7チームをつくり、輪番制で、内科と外科の救急体制を確保していることなどが報告され、意見交換した。

【伊達市】

平成21年1月31日（土）午後3時30分からホテルローヤルで開催。出席者は28名であった。

長瀬会長が、「伊達市には、小児救急地域医師研修事業で、昨年10月にもお伺いしている。どうか忌憚のないご意見を聞かせていただきたい」と挨拶。

守谷胆振西部医師会長が、「開業医が協力して胆振西部救急センターの夜7時から10時まで1次救急を支援している」と現況報告を交え挨拶された。

伊達市の模様

西里室蘭市医師会長は、「救急、産科だけでなく他科も考慮しなければ初期救急の確保は困難。公的医師派遣システムの充実を図ることが重要」と指摘。

苫小牧市医師会からは田辺理事（医療政策等検討委員会委員）も出席された。

前田胆振西部医師会副会長が座長を務め、意見交換した。出席者からは、「脳神経外科、整形外科医が不足している」「初期救急を充足させない限り、二次・三次救急は維持困難」「特定健康診査の受診率の上昇と相反してがん検診の受診率が激減」「患者は胆振・日高の圏域を跳び越して札幌に流れる」「がん治療の地域格差を解消するため、札幌以外にもがんセンターを設置して欲しい」などの意見が出された。

【北見市】

2月7日（土）午後3時からホテル黒部で開催。出席者は28名であった。

長瀬会長の挨拶に続き、古屋北見医師会長は、「郡市医師会と道医が意見を交わすこの機会に、忌憚のない意見を述べていただきたい」と挨拶された。

小林紋別医師会長は、医師会員が道立紋別病院の勤務医とチームをつくり夜間救急体制を確保している状況を紹介し、「本年4月に夜間休日急病センターを開設予定であったが、医師が確保できず開設できない。当分この体制を続けざるを得ない」と報告。

田中遠軽医師会長は、「夜間救急は、かかりつけ医が対応する。北見、紋別の影響が遠軽にも及んでいる。遠軽では常勤医を確保できず、精神科がパンク状態」と説明。

工藤美幌医師会長も若い医師が少ない現状を嘆き、こういう会議で方向性が見出せればと述べられた。

森本北見医師会理事（医療政策等検討委員会委員）が座長を務め、一次救急医療、道立北見病院・道立紋別病院の存続、有床診療所問題などを挙げ、出席者に各地の状況の報告を求め、意見交換した。

網走医師会は、「軽症受診は減ってきてはいるがコンビニ受診が一番の問題」と指摘。他にも「夜間救急を担う医師の平均年齢は63歳超、高齢化が課題」「北見赤十字病院の問題は北見市医療問題協議会で検討」「道立北見病院の循環器内科、心臓血管外科は欠かせない存在」「地方の有床診療所は終末期患者の拠り所」「介護療養病床は必要。北見の入居待機者は850名、1年半待ち」などの意見が出された。

北見市の模様